

広表遺跡 現地説明会資料（令和5年10月14日）

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1 はじめに

広表遺跡は北上市村崎野 21 地割地内にあります。このたび「北上工業団地整備事業」に伴う造成工事が計画されたことから、埋蔵文化財の有無の調査が行われ、その結果、新しく見つかった遺跡です。工事に先立って、遺跡の内容を後世に伝えるために事前の発掘調査を行うこととなりました。



2 調査の内容

私たち（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、面積約 14,900 m²を対象に今年の4月から発掘調査を進めてきました。その結果、北東側の斜面一帯からは縄文時代と平安時代の^{たてあな} 竪穴住居が見つかり、当時の人々が一時期定住し、集落を営んでいたことが明らかになりました。また、一方では遺跡全体から食料を確保するための手段である^{おと} 陥し穴状遺構が多く見つかり、狩猟場として利用されていた場所であることも判明しました。

陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は調査区全体で 60 基以上が見つっています。形状は円形・溝状・楕円形と様々ですが、円形が最も多く、中には^{わな} 罠に入った動物に対しての殺傷力を高めるために杭（^{さかもぎ} 逆茂木）を1～4本設置していた痕跡が認められるものもあります。

陥し穴状遺構は狩猟対象となる動物が通る道（^{けものみち} 獣道）に沿って設置され、数基ま



とまって配置されている傾向にあります。陥し穴状遺構の形状については作られた時期の差や捕獲対象動物の違いによる可能性が考えられます。

竪穴住居

縄文時代

調査区東側で縄文時代前期を主とする竪穴住居が4棟見つかりました。形状は楕円形ないし長方形で、規模は最大で長さが7mを超えるものもあります。住居の床面には屋根を支えるための柱穴や調理を行った炉跡と考えられる焼土、住居の壁際には壁を保護するための壁材を埋め込むために掘られた溝などの痕跡が確認されました。



また住居内からは土器や石器が出土しています。

平安時代

平安時代の竪穴住居が調査区の東側の平坦部で1棟見つかっています。検出面から床面までの深さは約70cmあります。埋まった土の中からは土師器・須恵器などの土器のほか、砥石など生活に使用されたものが出土しているほか、縄文時代の土器や石器も見つかっています。東壁側のやや南側寄りの場所にカマドが設けられ、付近の床面の一部が焼けて赤く変色していました。また、煙を屋外に排出するための煙道がトンネル状に掘られ、住居の壁面から約80cm東側に煙を出す穴が確認されました。



今回の調査で見つかった平安時代の竪穴住居は1棟ですが、調査区の東側では遺物が点在して見つかっていますので、後世の造成工事によって失われた可能性もあります。住居の時期は10世紀初頭頃と考えられます。

調査終了後は今回の調査で見つかった遺構や遺物を深く検討する予定です。